

## ニヤーヤ学派の討論思想 : 仏教徒との論争史の解明

須藤, 龍真

<https://hdl.handle.net/2324/4059957>

---

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 須藤 龍真

論 文 名 : ニヤヤー学派の討論思想—仏教徒との論争史の解明—

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、紀元後 9-10 世紀にカシミールで活躍したニヤヤー (Nyāya) 学派の学匠バッタジャヤンタ (Bhaṭṭajayanta) によって著された『論理の花房』(Nyāyamañjarī) 第 11 日課後半及び第 12 日課 (以下、「議論学章」) を主たる対象とするものである。

バラモン教の哲学諸派のうち、ガウタマ著『ニヤヤースートラ』を根本経典とするニヤヤー学派は、認識対象の論理的追究による解脱を説き、真実／実相 (tattva) として認識論・論理学・議論学に関する 16 原理を挙げる。このような思想的背景のもと、インドにおける論理学及び議論学の発展に当学派が果たした役割は大きい。『論理の花房』は『ニヤヤースートラ』への注釈という体裁をとりながら、先行するニヤヤー学派の論師や異なる議論学の伝統を有する仏教徒などの見解に言及し、時に批判している。資料集的な性格を有する当該文献において、全 12 日課中の約 2 日課分に相当する「議論学章」はインド討論思想史の構築に有益な多くの新規情報を提供することが予期される。しかしながら、刊本の不備を含む基礎的研究の不十分さからか、当該「議論学章」に関する思想研究はほとんど為されておらず、当該「議論学章」全体に対する現代語訳すら未だ為されていない。このような背景から、本論文では、『論理の花房』「議論学章」の複数の写本に基づくテキスト校訂及び訳註研究を行った。また、その成果を利用し、ニヤヤー学派内外の議論学文献との比較検討を行い、中世インドにおける討論思想史の一側面を明らかにした。具体的には以下の通りである。

本論の序として、ジャヤンタが『論理の花房』冒頭で提示する 16 原理の「本質」(svarūpa) 及びそれらの個別的提示を正当化する道筋を明らかにした。

第一章では、ジャヤンタが「論議」「論争」「論詰」という議論の三形態を「欲望を離れたもの達による議論」と「勝利を望むもの達による議論」という議論の分類を用いて再定義していることを明らかにした。「論議」において承認される「敗北の根拠」の数などの点でジャヤンタは先行説に対する新解釈を示しつつ、「浄化」という新概念を用いて「論議」を位置付けていた。

一方、「論諍」は含意された意味の相違によって「論議」から区別されるという解釈を提示していた。また、彼がダルマキールティの「論詰」批判に応答している可能性を指摘した。

第二章では、ジャヤンタの「擬似的理由」の構造を明らかにした。ジャヤンタ以前の論理学説を正しい理由の条件と誤った理由の条件という観点から整理し、その上で、ジャヤンタが仏教論理学説を自身の論理学の枠組みに形式上の整合性と内容上の整合性をとりながら導入する過程を示した。その際、ジャヤンタの著作間で異なる擬似的理由の下位区分の枠組みが見られることを指摘した上で、関連するニヤーヤ学派内外の論理学説との関係性を明らかにした。

第三章では、ジャヤンタの「擬似的理由」論において特徴的な「引き起こさないもの」「引き起こすもの」という論理概念の位置付けを彼の遍充把捉論の検討や先行するニヤーヤ学派内外の諸論理学説との比較を通して考察した。その結果、これらの議論がインド論理学における必然関係を巡る問題の延長線上にあることを明らかにした。また、その種の論理概念がクマーリラの所説に起因するものであり、後代のニヤーヤ学派において「わきにあるもの」(upādhi)の理論と密接に関わり合いながら展開していることを指摘した。

第四章では、先行研究の乏しいニヤーヤ学派の「曲解」概念について、特に「言語に関する曲解」と「転義的用法を対象とする曲解」の相違に関する議論に焦点を当てて考察した。その際、ウダヤナが新たな曲解定義及び論理学の体系に沿った曲解の区分を示していることを明らかにした。また、ジャヤンタの「曲解」論に特徴的な点を指摘し、「曲解」と「敗北の根拠」との関係についても考察した。

第五章では、ジャヤンタの「詭弁的論駁」論について考察した。前半部ではニヤーヤ学派において「詭弁的論駁」が承認される文脈を整理した上で、ジャヤンタがヴァーツヤヤナ説に寄り添った詭弁的論駁解釈を行っていることを指摘した。また、この議論にウッディヨータカラやダルマキールティの所説の関連性が見出されることを指摘した。後半部では詭弁的論駁の再定義・対象・論証例・下位区分という観点から彼の「詭弁的論駁」論の構造を明らかにした。

第六章においてはジャヤンタの「敗北の根拠」に関する議論を考察した。「敗北の根拠」に関する基本的な定義などを整理し、とりわけ「無実行／無理解」(apratipatti)に分類される敗北の根拠の理論的変遷をダルマキールティによる批判と後代のニヤーヤ学派の論師による応答という観点から明らかにした。